
零の武刀者

OGRE-ASHYURA+1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零の武刀者

【Nコード】

N0517W

【作者名】

OGRE - ASHYURA + 1

【あらすじ】

依頼品作

各地から集められた生徒達に色々な体験を踏みながら成長していくストーリー。

個性豊かなメンバーが起こすハチャメチャなハーレム系作品に仕上がる予定

邂逅の序章

世界各地の『有能』と判断された少年少女達が集う群島地帯に設立された学園に突然全世界から呼ばれた小中高の学生達が粗、強制的にその学園に連れてこられた。生徒達は国のトップシークレットの内容に触れる人物や彼のように代々の武道家家系の有名な血筋、有名校の主席学生……。などなど……。いろいろな経緯でこの学園に来ている。

「此処か……。俺の通う学園は……」

背中に大ぶりで装飾の多い剣を担いだ男子生徒が彼の学校の物であるう学生服を着崩していた。その彼の佇む船着き場の上空を三機の編隊を組んだ最新式の輸送機が着地し大柄な迷彩服の学生と小柄な少女が降りてくる。サングラスを取り華奢な白い手を額に当て飛行編隊が去って行くのを見守り、自分の近くに居る他の男子学生と女子学生に指示を出し太ももに付けてあるホルダーについている黒光りする金属の塊を手につかんだ。その背後にいる大柄な少年が制服の内側に手を突っ込み彼女の……。いきなり放たれた二発の弾丸を細身の曲刀を振り抜き弾き落とした。

「随分なあいさつだな。水無月、俺の学園と犬猿なのは十も承知で無警戒を貫いた男に対する礼節か？」

「……貴様はそれで殺気を抑えていたと？ はっ……。笑わせるな」「そうか、それは悪かったな。だが、十八番のM93RとM92Fを揃って噴かせるか？ 俺だからよかったが……」

「ふっ……。貴様でなければ私の弾丸は放たれない」

大よそ人間じみしていない会話の後に少年は船から降ろされた黒塗

りのバイクにまたがり速度を上げて坂を上って行く。迷彩服の小柄な少女は他の生徒が用意した軍用車両らしい妙に堅い作りの車に乗って行った。その後も空港や港に飛行機や船が着き、続々と生徒が集まり出した。近くの飛行場に小型機が二機、特別に用意された客船なや海底の高速道路のバスなど……。連れて来られたり、自ら来た生徒の数は全く見当もつかない程、沢山いた。彼らはその内の一人だったらしいが……。制服から学校はだいたい絞り込めてきた。一番多いのは国家機密級の学生や幼育関係の皆、次に多いのは才能の卵……。最期が彼らのようにとても大きな大成した力を持っている学生。彼らのような者達が次々に全世界から送られてくる。そして、国際連盟の囁みあいからその学園に……。

「これより諸君らは我が校の生徒と成りました。……」

始業式の後には早速テストを開催。基礎学力、基礎体力、専門性を判定して彼らの適性をはかり希望とかみ合わせた形の学部編成を組んで行くのだ。その決定から二日が経過し学部の配分、授業選択、寮生活の選択を決定し授業も本格化。その中で第一校舎、戦闘系実習学生幼育機関を持つ校舎の屋上の貯水タンク横に寝転がり真新しい学生服をさつそく着崩している船で港に現れた男子生徒。そこに迷彩服から女子のセーラー服に着替えて長い靴下に包まれた足に拳銃のホルダーを付けた……。見なれた少女が入口を開き屋上に上がってくる。その時、彼の手から白い光を持つ何かが放たれ壁に突き刺さった。扉の横には数か所の穴があき細いナイフが数本刺さっている。彼の所持しているクリスタダガーだ。彼は私立笹島学園の二年生。体格の良い筋肉質な男子生徒。これまでの授業参加回数0回。そして、クラス選抜テストの成績はオールマックス……。マルチタスクと言ってもおかしくないレベルの出来栄であった。しかし。彼はこの学園に強制的に連行されたに近い。この学園の関係者が数人彼によって再起不能にされていたのだ。それほどにできる彼をこの

学園に無理に引つ張って来ればこうなる。そして、彼は教室入室したことが無い。

「県 正人。貴様、学級代表生徒が何故一度も授業に出席しない？」
「面倒だ」

「そうか、獲物は返させてもらう。しかし、単位を取得せねば貴様は落第するぞ」

「いや、それはない。俺は此処へ強制的に連行され……ある条件の許に此処にいる。それは『平常の自由』だ」

そう言うと彼はタンクの据え付けてある小さな棟から飛び降り彼から見ればかなり小柄な少女から8本のクリスナイフを受け取り、4階建ての校舎から飛び降りて走って行く。この二人にはこの展開が付きものなのだ。彼女がポケットから携帯電話を取り出しいきなり伝令を始める。彼女はこの学園切つてのコマンダーであり行動派でもあった。そこでポーチを部下から受け取り武器のパーツを組み立て始める。

「キャット1！ 目標が中庭に逃亡！ 直ちに付近の待機班に伝令し格闘部隊を分隊させ彼の捕捉に努めなさい！」

「はっ！」

「キャット2！ 目標を追尾し行動パターンのデータ化を急げ！」

「はっ！」

「キャット3！」

「わかっています。動きを収束させるために動きます」

彼の動きはこれで3回目の逃亡のせいかわ簡略化された行動パターンデータに乗っ取った動きを取られ次々に退路や行動ルートがふさがれて行く。しかし、彼も簡単には捕まらない。格闘系の戦闘員数人が次々に倒されて行く。訓練された正規の戦闘とは違い形態の決

まっついていない彼の格闘スタイルに翻弄され鞘に包まれた帯刀に打たれ昏倒していく。最期には班長が正人と呼ばれた長身の男子生徒に倒されてから2班が動き出す。少女に重苦しい伝令が伝えられ銃を構えた訓練学生に発砲許可が下りた。

「格闘戦闘員全滅しました！」

「……」

「携帯命令をください」

「よし、アイツならば発砲しても万が一も無いだろう」

「は、これよりキャット2は前進します」

それから順調と見えた滑り出しで瞬時に敵兵は全滅した。彼は…
…刀剣の猛者。その相手に近づきすぎたのだ。簡単には彼が隠れていた場所にぶつかってしまった…とということである。いきなりの彼の出現に驚いた2班は本物の黒光りする黒い武器を…使用できない程に分解バラバラにし鞘に納めてからそこにいた8人ほどの迷彩服を着た学生が倒れた…。無線の途絶…それは安否が確認できないことは聞いている。そして、キングの駒が動き出したのだ。

「私のこの相棒から逃れられる訳ない……」

対戦車ライフル… M95の咆哮が大きな赤い火と共に放たれ大ぶりの弾丸がジャイロ回転しながら校舎を飛び越えようとした正人に向けられた。そして、帯刀が抜かれ黒い刀身が陽光を返し大ぶりの弾丸を叩き斬る。2発目が咆哮と共に彼に迫る…薬莖ちっほの落ちる音と共に正人は反撃するため突っ込み銃弾を右頬にかすめククリ刀と呼ばれる刀を首を外して地面に叩きいれ彼女を押し倒し首の横に小さな皿のような跡を作った。

「なかなか大胆な策だな。まさか、大将をとりに来るとは……。貴

様もおおちゃくな事をする」

「ほう、別に普通だろう。お前を取り押さえてその白い首にククリをねじつ込めば戦場では俺の勝ちだ」「ちっ……今回は逃がしてやる。だが、次はこうは行かんぞ！ ……聞いていない」

戦鬪科の学生達は戦鬪科目において選ばれ彼は戦鬪科の近距離戦鬪の武術科目を選択していた。その中でも最高の段位を保持し人柄以外は誰一人として非を打てないものだ。しかし、授業態度の悪さは教師達にも目を付けられている。それでも彼は先ほど彼が述べたようにこの学院に転入が決まる時に国際連盟の理事国の理事達、その面々の目の前で正々堂々と『揺るがない自由』を条件に入学するという言葉を放ったという。そのような経緯を踏んでいる。だが、彼らのデータベースなどから見ても彼の出生は謎……日本人であることと父と母が現在行方不明であること意外は何もないのだ。あると言えはとも危険な刃物を隠し持っているという点だけだろう。

「しかし、よくもまあこんなに緻密性の高い町を作ったものだ……」

学術都市……。それは群島地帯に作られた島々を橋や海路、海底鉄道などなどのラインを利用した作りになっている。彼は海底の高速道路を使い隣の『日本町』と呼ばれるエリアに入って行く。そこでバイクを止めてから彼は山に入って行った。太い木が生い茂る林とでもいおうか……。その奥の少し開けたところで彼は帯刀を抜き近くにあった木を一刀両断する。彼の持つ帯刀は珍しい型をしている。鐔は家紋らしい丸に……十文字だろうか？ いや、少し違う。どこの家紋とも言い難い形状のそれに刃は黒い。美しいカーブを描くその刀を白い装飾の鞘に納め近くにあった小屋から工具を取り出し木材として使うように切り出し始めた。よく見れば林の奥に同じ長さに切り揃えたそれらがある。彼がそれを担ぎ丸太を運び始めた。何をするつもりか解らないが彼には彼の思惑があるのだろう。

「おう、正まこと。元気してたか？」
「何だ？ 哲か……危うく首筋に斬りこみを入れそうになったぞ」
「おおいおい、親友にだけは刃を向けないんじゃないのか？」
「ああ、基本的にはな。しかし、最近は付きまとう軍事科の連中のせいで警戒心が研ぎ澄まされてるんだ。気にしないで……とは言えないが出来る限りこの話題には触れないでくれ」
「了解。しかし、ホントにログハウスなんて造っちまうんだな」

ログハウスを造る……。まあ、それはさておき彼の友人らしい男が現れ彼に協力し始めた。正人はそれに応じるように作業の工程の簡単な説明を始めている。木を運びどこから手に入れたのかかなり本格的すぎる。滑車を使い丸太を目当ての巨木に付けて木材を固定し足場を作りどこからともなく木材のパーツを運び足りなくなれば……一刀両断してきた。その作業で時間が過ぎ昼時を迎える。その林の中にまた一人、メンバーが増えた。大ぶりの重箱を抱えた、女生徒としては平均的な身長的女性がきつちりセーラー服を規範のとおりの着用のまま、革のおよそ森歩きには適さない靴で現れる。

「やってるねえ……。お昼まだでしょ？」
「なあ、誰だ？」
「お、おい、おま……」
「へえ、忘れたんだあ……。数少ない友達にしてお向いさんの幼馴染だった女の子のことを」
「ああ、焔群エンケウか」
「まだ名字なのか！？ お前いい加減にしるよ……」
「仕方ないよこの人……。ずっとアタシと話してる時もだんまりだったもん」

焔群と呼ばれた女生徒がレジャーシートを広げて風呂敷包みを開

ける。すると、飲み物が無いことに気付いたらしく一度彼女の家に戻って取りに行くといった。少し開けた場所に彼女は移動すると……。

「そうだな、ここでは安易にその力を使えるもんな」

「安易につかえる訳ないでしょ？ これくらいの簡単な力でも結構、気を付けないと人が焼け焦げるんだから。アタシ、正君とテツツンの丸焼きなんて見たくないし……」

セーラー服の裏側に蒼い炎と紅い炎の入り混じった一対の翼が生えて？ いや、違う。現れたの方が正しいか……。強い風圧を生み彼女は空に舞い上がって彼女の家の方に飛んでいく。啞然とするテツツン……もとい、哲と既に重箱の蓋をあけて中身を吟味している正人。暇になった二人は過去の話を始めた。正人はクリスマスダガ-を取り出し木切れに斬りこみを入れながらではあるが……。細作業をしていらしい。

「だが、懐かしいなあ。お前はお爺さんの勧めで笹島学園……俺は親父の設立した賢武園、龍は公立の高校だし……。お前、相変わらず偏屈だよな」

「そうか？ 俺は俺のままだ。お前はチャラチャラすんな」

「いや！ これ地毛だから！ 何その『え〜？』的な鈍い視線！

……髪と言えばお前も伸ばしたんだな？」

「斬りに行くための時間がもつたいない」

「お前さ。鉄はないのか？ ナイフはたくさんあるのに」

「俺はな……。収集家じゃないんだぞ……」

そこに龍と呼ばれた少女が降り立った。顔を赤くした哲の胸倉をつかみ拳に炎を纏わせる龍。笑っているが笑っていないというよくあるパターンだ。彼女は公立の高校に通っているためかかなり文化

的には平たい。いろいろあるのだ。スカートは規範の範囲ではあるが元々長さの規範はそこまで厳しくない。なぜなら科によってはいろいろ事情があつて長いと困ることがあるからだ。逆にこの学園創立の上で日本、アメリカ、インドに次いで出資、技術投資が大きなイギリスの世界的に有名な超お嬢様学校『聖ヴィーザ女学院』のお嬢様など……引きずらんと言わんばかりの長さのスカート……逆に日本の私立の高校や軍事系の女生徒は短いことが多い。軍系の女生徒は太もものバンドに細い警棒、折りたたみ式トンファー、付けている人は割合小さめな拳銃、懐中電灯やスタングレネードなどを付けている。日本の女学生は別に理由などないが異文化尊重などというよくわからない発想からミニスカは黙認されている。規範は一応存在しているためそこそこではあるが……。校章の保持、学生証の携帯は義務。華美な文化的とみなされない装飾品等は不可、学校指定の制服以外の制服の着用も不可、加え銃刀法違反となるのは許可のおりている戦闘系学部以外の生徒の武具とみなされる物の保持……など、意外と内容はかなり深い。

「今、中見たよね？」

「は？ ななな、何を！」

「ふん、で？ 用事はすんだのか？」

「あ、うん。お茶。はい」

「ありがたい」

「テツツンは許してないからね？」

こめかみに十文字のマークを刻みこんで迫る龍は紅い髪の紅い瞳ととても珍しい色をした人だった。肌は白く、体中細くしまっている。拳に真っ赤な炎を燃やしている彼女をたしなめようとせせずにどこからともなく取りだした生肉と彼女の持参してきた弁当をつついている。

「おい、何を見たのか知らんがお前も年頃の女になったんだろ？
もう、あの頃のようにランドセルを俺に持たせようとした『か弱い乙女』ではないんだ。淑女の風状を保て。それに、その『火』は人を殺すために使う物ではない……と聞いたはずだが？」

「う……正君に言われちゃ……ちっ！ 命拾いしたわね！」

「それから黒い下着は控えろ」

「え？」

「だから、ジंकウスにもいろいろあるんだ。黒い衣服、特に肌着は『死』を招く」

「見たよね？ 正君は信じてたのに……見たよね！ うがあああああ！」

わりと大きな石をそこに置き熱を伝導させ生肉を焦がしていく。

香ばしい香と共に油の飛ぶばちばちという音が聞こえる。正人の後ろでは涎を垂らす哲……。一つ目の肉を箸で後ろに放ると哲が一瞬の隙間も狂いも無く口でダイビングキャッチした。……その光景に怒る気力も無くなったらしい龍が少しむすつとはしたが弁当で加熱した方が美味になるであろう物を箸でおいて行く。

「ああ、もう何でもいいよ……。なんか画期的なことに利用されちゃったし……」

「無駄なエネルギーにはしない方がいいだろう？」

それから数時間し夕暮れ時になる。三人が帰路につく。背中の子や工具を持ちかえり完成したログハウスは何に使うかなどを言わずに三人は帰る。哲はこの近くに家があるためかすぐに別れた。龍は隣の島にこの学園の研究所に勤める父親の関係から核家族と言えばそれだろう……。一戸建ての家がありそこに帰る。正人はその島を経由して自分の寮がある群島の軍事、戦闘関連の生徒が集まる島に帰るのだ。『日本町』に龍を送り父母に挨拶をしてから再びバイクに

またがり家に帰る。

「あ！ やあつと来た！」

「ん？」

「『ん？』じゃないですよ！ 寮母の私が怒られちゃったんだよ？ 保護責任は私にあるんだし……」

「あ、いえ、お構いなく」

「い、いえおかつ……ってちがあう！ だから！ 毎晩帰って皆でご飯食べてくれないと私が怒られちゃうの！ 君が居ると迷惑なんて思わないから……って言うか君が居ないと迷惑なの！」

「あ、はい、解りました。一週間に一度は帰ります」

「全然解ってない！」

寮に帰ることが稀らしい彼は到着してから一回も来たことがなかったらしい。大柄な体格のため扉をくぐるときも頭を下げる。彼が入るたびに寮に居る学生たちは皆怖がる。元々、目つきも悪く筋肉質で日ありということも関係しているが……。背中の刀を部屋に置くとき寮母さんに学園の使用許可書もらい校舎に向かって走って行く足には規格外な重さの重りをつけていた。普通の人なら1キログラムなどは負荷をかける程度に使うだろう。しかし、彼は恐ろしい重さのもはやウエイトトレーニングのレベルを逸脱した重さの重りをつけていたのだ。

「先約か……」

「ほう、こんな時間に貴様が来るとは」

「水無月か。なんだ？」

「私しか居ない。使えば良からう。それとも女と二人きりという……」

「お前相手にそれを考えるやつはそうは居ないさ。違う。俺は一人が好きなんだ」

「なら、私が居てもいなくてもいいだろう。お前には空気なのだろう。我々のような人間は」

「険悪なムードが立ち込める中、彼が『勝手にしろ』と言葉をつぎ、ベンチプレスを使い始めた。彼は常人とは思えない。筋力、柔軟性、俊敏性、持久力、精神力……そんな才能を見込まれ軍事科に呼ばれていたらしい。しかし、彼が軍関係の役人に付けたのは了承の言葉ではなく喧嘩を煽るような挑戦的な言葉だった。それが彼らの笹島学園の意向でもあったからだ。たとえ彼らは手を挙げられても相手を無理に叩こうとはしないのだ。それと軍部のキチキチした規律を嫌う笹島学園の面々、それに水無月と呼ばれた少女のいる南戸学園は校則も厳しく規律を好む学風……あまりにも対立しすぎた二校の関係の縮図の二人は噛み合うはずもない。」

「貴様……どんな体しているんだ？」

「は？」

「アップをしたらずぐに130キロのベンチプレスを軽々と持ち上げられるんだからな」

「俺はそういうトレーニングを積んできている。それに、明日は授業にでる。寮母さんに迷惑をかけていたらしい」

「寮母さんのおかげか？ お前はどれだけ無神経なんだ？」

「別にいいだろう……お前は俺の保護者か？」

彼はいろいろな物をトレーニングに使うと柔軟を始める。トレーニング用のシャツとスパッツ姿の水無月がいきなり面白いジョークを話し始めた。柔軟をしていた正人の腰辺りまであるポニテールをつつかみ……。

「これ、頂戴」

「は？」

「貴様は何かと私が言葉を継ぐと『は？』と言っな」

「ヅラにでもするつもりか？」

「Yes」

「は？」

「また言った」

『水無月 レイ』はアメリカ人と日本人のハーフである。そのため彼女のアメリカ人の母親がもっていた特徴である白っぽい髪と蒼い目を受け継いで日本人であるため違和感が大きいらしい。だからというが彼の直毛とは違い彼女は猫毛……少し髪質が違いすぎる。いや、それだから羨ましいのかも知れない。彼らはしばらく馬鹿らしいやり取りを続け結局は決裂して話が終わっただけらしい。まあ、彼の性格では有り得ないだろう。

「しかし、『アイアンメイテン鋼鉄軍女』がこんなやつだったとはな」

「私も『零の武者』(ゼロバスター)と呼ばれる程の殺人鬼がこのような普通の人間であることをしり驚きだな」

「訂正させる。俺は人を斬りはするが殺したことはない」

「そうか、だが、残念だ。私も黒髪が良かったのだからな」

「いい加減にその話題から離れる」

レイの学園、南戸学園は私立でアメリカの大型資本家と日本の前向きな資産家が連携して作った空母に本部を置く巨大な学園だ。そこは軍その物の教育をする。規律を守り何時如何なる時も仲間を信じ戦い続ける……そして、彼らは前向きに直向きに国のために尽くす忠誠心の塊と言えよう。その中でも階級区分の上で一番上位を飾る『元帥』の称号を持ち成績や人柄、素行までもが完璧な彼女は『アイアンメイテン鋼鉄軍女』と呼ばれ、冷徹な眼差しと小柄ではあるが威圧感と刺思的感情表現を見せる。

「俺はお前の狙いには既に気づいている。どうせ、俺をそちらの側に引き入れたいのだろう」

「間違つてはいない。しかし、私も感情はある。それだけではない……たがらだ。私は貴様が気に入っておるから……目をかけてこちらに協力して欲しいのだ。私はそのためならばどんな手を使うこともじさない覚悟を持っている」

正人が立ち上がり部屋を出ようとすると彼女が手を取ってきた。

どのような手を使うかは想像に任せるが彼はその誘いすら断り寮に帰って行く。寮は一人部屋と二人部屋の選択が可能でたいは二人部屋に配置される。ただし、彼だけは例外でだれども関わり合わずずっと独りですごしていた。その日も寮母さんに帰宅の知らせをしてから彼の部屋に入りそのまま就寝前まで独りで何かをしていたらしい。この島の所有者は実は彼の養育者になつていた老人の所有地で寮母さんはそのお孫さんだった。だから、彼も彼女にだけはちゃんと話をしていたのだ。そして、翌日。彼が初めて教室に入ると……。

「本当に来たんだな。県」

「言つただろう。今日は来ると」

「そうだったな。これから、射撃訓練に行くのだが……一緒に来ないか？」

「悪いが今日は俺にもやらなくてはならないことがあるんでな。まずはそれから頼む。それから……俺はお前のように銃器は使わない」

にこやかに話しかけたレイが彼が背を向けた瞬間に殺気をむき出しにしたために周りが怖がり始める。そのまま自分の席に着き不機嫌さをむき出しにして読書を始めた。彼は席に着くや脚を投げ出し居眠りを始め、ホームルーム終了後に起き出した。それから、レイと正人の殺気に当てられ続けたため解放されたかのように他の選択

した学部に分れて行ったようだ。

「お待ちせしました。瀧蓮寺さん」

「うん。待たされた」

「で？ 何かごようですか？」

「ええ、用がないと呼んじゃいけないの？」

「できれば用向きの無いときは呼ばないでください」

「うーん。じゃあさ。アタシとつき合ってよ」

「嫌です」

「うわっ……即答ですか……結構傷ついちゃうよ。アタシ」

「心の中見え見えですよ。内心はかなり俺を罵倒してますよね」

瀧蓮寺と呼ばれた年上らしい少女が完膚無きまでに正人に負けたため悔しそうにその場を後にしたのを目の隅に入れ刀を抜き払い木の棒を数本……目にも止まらぬ速さで切り刻んだ。そこに……。

「わあ！！ 凄いわあ。あなたどなた？ 軍事科の方だとお察ししましたか」

「県です」

「アカタ？」

「あ『が』たです。あなたは……『聖ヴィーザ女学院』の『聖女』と名高い。シュヴァルツェン家のご令嬢ですか」

「よくご存知ですね。はい。私はエルシレナです」

「そんなに馴れ馴れしくしていいんですか？」

「そんなこと気にしてらっしゃるの？ どうせ無理やり連れてこられたなら楽しまなくては損ではないですか」

使用人らしい二人に急かされ彼に陽気な調子で手を振替りつつ歩かされるエルシレナ。彼は突然の来訪者に驚きつつも剣の稽古を再開し昼になると休憩をしていた。この学園の校舎や学部は島と島で

別れていることもありなかなか友人と会えない学生も多い。しかも、ここはグローバル化が進みきっていない中途半端なごちゃ混ぜ区域だ。そのため、バイリンガルなどの二ヶ国語を扱える者やそれ以外の者ばかりではないためなかなか友人を作れない。特にシャイであったり内気、その他いろいろは一人で居る傾向にある。彼のいる武道場は数少ない武術科の生徒が使う場所だ。だが、武道場を使うような武術を扱う人間はここにはあまり居ない。板張りの武術はかなり限られてくる。柔道、合気道諸々は畳、相撲は土俵……他にも場所が確定しているため彼は殆どそこを独りで使っていた。たまに女性の剣士が来るようだが先約の彼が居るのを確認するとすぐに帰ってしまうようだがそんな周りに人が居ない殺風景な日本家屋の開けた中庭に炎の翼を背中に持っている少女が舞い降りた。手に持っていたのはやはり重箱だ。

「そんなに暇なのか？ 普通科に進学したらしいが」

「暇だよ。正君こそ、刀しか振るってないじゃない」

「俺は入学条件に『自由』が組み込まれてるからな」

「何それ」

「国連のお偉いさんに呼び出された時に契約させたんだ。学院に来てやつてもいいが俺だけは馬鹿らしい授業や課題をやらなくてもいいっていう条件だ。だから、何もしくなくていい」

二人が弁当を食べる途中に今度は巨大な鳥が近くの建物の屋根に着地した。今度は哲だ。彼は体に特殊な遺伝子を持った血統に生まれている。その特徴を受け継ぎ『臨界進化』と呼ばれる本来は起り得ない体を得たのだ。彼の体には特殊な形態を自由に変容できる細胞があり資格から取り入れた情報と触覚から得た情報を本に体を形成。匂いの分泌は嗅覚で認識すると可能になるなど彼の体の機能は様々。それをフルに利用し、もとより鍛え上げられた肉体もかみ合いかなり実用性は高いと見える。

「俺だけ省けにやしないですよ。あ、デートだったか？」

「ちっ、ちが！ 違っつたら！」

「なら良いよな？ いただきます」

この三人は皆、学部は違っがよく集まる。幼なじみらしい。仲良く昔のことを話しているようだ。その間はさすがに刀を近くに置くだけにしている。食べ終わってもしばらくはそのような話が続いていた。彼らの会話から彼らの情報が少々聞き取れる。

「で、正人は爺さんが亡くなってからは一人なのか？」

「必然的にな」

「寂しくないの？」

「そんなことはかけらも思わないな」

「でもよ、殺風景な部屋より賑わいがあった方がよくないか？」

「今なら龍が住み込みで世話してくれそうだし」

「そんな訳無いでしょうが戯け。あたしは普通に通うならいいけどさすがに住み込みは……」

「俺は別に居ても居なくても変わらない」

「ほら」

「お前、ホント、無愛想だな」

続いて龍の話になる。彼女は『フレイア』と呼ばれる『新人類』の特長を持って生まれた少女だ。人間とはことなり彼女の場合はどんなに高温の場所に居ようが溶岩や火山口に叩き込まれたところで火傷一つしない。DNAにそのような性質を記録した箇所が発見されたらしいのだ。加えて彼女の父親はイフリートと呼ばれる古来から異能を持ち続けて来た血統で母親も同様の経緯がある血統。違いと言えば父親は体の耐熱性が高く核爆弾の放射線に焼かれても耐えられる対質だが炎を体から放出させたり自在に操ることはできない。

反対とも言わないが彼女の母親は耐熱性はライターの火で傷が付かない程度でマグマなどに入れば死んでしまう。しかし、体から一定の温度の炎を噴出させ纏うことができその炎を自在に操ることができるのだ。そのサラブレッドとして生まれたが最近、学芸会に存在が明るみになるまではずっと本人も知らない事実だった。

「で、でも。正君が……いって言うなら住み込んでもいいよ」

「いや、そもそも、お前は学科の棟が違うだろ？」

「何よ、言い出しつぺ。アタシはね。この能力のおかげで軍事化に即時転入が可能なの」

その和やかなシーンを見ていた人物が一人。たまたま、武道場の前を通り過ぎようとしたときあまり人が使わない武道場から明るい人の声が聞こえたからだ。三人を目に入れると何かを決心したように足早にそこから居なくなる。そして、次の日に小さな事件が起きた。

熱炉溶鋼

ある日の夕方。彼の居る道場で彼はとても驚いていた。

「正人は私が嫌いか？」

「嫌いではな……」

その瞬間に顔を俯かせていた少女が両目に涙をためて彼に流暢な英語で話しかけた。彼女はアメリカ暮らしが長いらしく気持ちが高まったりすると英語になってしまいうらしい。『アイアンメイデン鋼鉄軍女』とは呼ばれようが一応は人間で感情もある。

「Please tell me, if you are acquainted with English」

『もし、貴様が英語を理解できていたのなら答えなすくれ』

「Why are you refuse me？」

『お前が私を拒絶するのは何故だ？』

涙ぐんで声が声にならず彼女のよく通るソプラノの声も濁りが入っている。正人の反応はこれまでとさして変わらないがトレーニング用のランニングとジャージのズボン姿で刀を納め地面についた。その質問に対して彼も英語で答える。彼がどこで語学を身に付けたのか知らないが彼も流暢に答えている。

「Nothing special」

『とくにはない』

珍しく私服のレイが彼の寮に近い道場に居る。彼がそこにいることは皆に知られていたため時間さえ合わせればいつでも彼には会え

るのだ。ただし、度胸と精神力が持てばの話ではある。

「So why?」

『なら何故?』

彼がいつになく重い瞼を開き真剣なまなざしをレイに向ける。彼の目は元々細いためよく見ようとするとただでだいたいの人間は縮みあがるか失神してしまう。しかし、レイのような猛者と呼ばれる人間や恐ろしく鈍感、または感情の受けが緩い人間ならば問題はないが。

「I can understand what I hurt
other」

『自分が人を傷つけることは理解できている』

「So, I have been alone in other
not to hurt everything」

『誰も傷つけないために俺は一人である』

「You have reason……Thought I hope
I want to be close with you」

『有るじゃないか……私はお前に近くに居てほしい、なのにか?』

恋愛事情のような発言が彼女から出ても彼は表情すら崩さない。

青い沈んだ瞳にさらに泣き色が強くなるレイ。正人は居づらそうに鞘をつかみ外の空を指して帰るように伝える。しかし、彼が出ようとするが彼の無骨な手をつかみ離そうとしない。そこに何時にない彼の感情のこもった深い声が響く。それに目を開いたレイにまだ彼は視線を合わせない。

「If you are indifferent existe

nce for me, I let you free」

『お前がどうでもいいのであれば勝手にさせている』

「I'm away from you as I want
to hurt you」

『むしろ、傷つけたくないから遠ざけているんだ』

間髪いれずに彼女にしては感情的な声量の言語が飛んでくる。彼の手首はさらに強く握られ動きが完全に制止させられていた。それでもあえて彼は視線を合わせないように前を向いているらしい。自身をどのように評価しているのか知らないが……彼の心は未だ彼女には開かれて居ないのだ。

「Don't be silly!!」

『バカを言つな!』

「I don't care even if you hurt
you」

『お前に傷つけられても悲しくなんかない』

「I'm sad to be alone and refused
than you do harm to me」

『一人でいることのほうが拒絶されたほうが胸が痛い』

次は背中に抱きつき離そうとはしないらしい。そのために彼が一言だけつぶやいた。別に彼はそこまで困りはしない用件だったということで……。彼女によやく振り返り鞘におさめた刀を右手に持ち替え左手を離させる。直後、彼は日本語でさらに深く言葉を告ぐ。

「ついて来い」

「n……」

「お前が拒絶されるのが嫌であるなら俺の近くに居たいなら俺の秘密を知る必要がある」

その時、大きな警笛が鳴り始め島の各部にある軍関係の施設から完全武装するあわただしい音がたつ。彼も彼女の手を引いたまま寮にある彼の部屋に飛び込み壁にかけてある重装備にも程がある防具と大量の多種のナイフ、剣、刀を装備しそれを終えたとレイに向き直る。軍事科の彼女ですらその手際に驚きながらもそれを見続けていた。それが終わると彼がレイに彼女の寮の場所を聞いてくる。

「お前の寮はどこだ？」

「は？」

「お前も『は？』って言ったな」

「え、あ、いや、北の軍部関係者の学生寮だが……」

「来い。振りおちないようにしっかりしがみつけよ」

正人がレイを抱き上げて屋上に上り走り出した。彼の身体能力は恐ろしいの一言に尽きる物だった。私服でスカートを着用しているため屋上を走らせると危険だと判断したらしい。驚いた蒼い目のレイが言葉を発する前に彼女の部屋についてしまい学生寮で彼女を探していたらしい女性の軍学生たちが正人を凝視している。本来男子禁制の場所に屋上から入ったために一応は下に降りなくてはならないからだ。屋上から飛び降りようとする彼を彼女が止めたらしい。

「水無月元帥！ お探していました！」

「そんなことはいいい！ 現状報告をしる！」

「イエス！ マム！ 現在未確認とはいえ小型攻撃艇と大型戦艦が管理水域を超えました。その後、我が船底の警告を無視し砲撃を開始こちらの被害は生徒に重傷一名、二名の行方不明者が出ています」

「解った。県。これからどうしたい？」

「今回は緊急事態だ。死人を出さないためなら俺はお前らにも協力は惜しまない」

「解った。へりに皆を乗せる！ こいつも臨時に部隊に組み込み敵に奇襲をかける」

そこで正人が首を横に振る。携帯電話を使い増援を呼ぶといい哲と龍の二人に連絡を取りへりの中で軍事科の女生徒達に説明した。彼の神がかった兵法知識に驚いている様子だ。次々に動き出す彼ら軍兵型の生徒たち。それを指揮するのはいつも彼女「水無月 レイ」なのだが今回ばかりはそうならず認知されていたはずなのだが実力が未知数な正人だからだ。

「まずはへりを三機に分けて俺と『アイアンメイデン鋼鉄軍女』のみの一機。これは
囧だ」

「な、元帥を一人に！」

「俺が居るだろう」

「そ、それは……」

「コイツの戦闘能力は皆が知っているだろう？ で？ 続きは？」

今回の作戦は囧の二部隊を使い敵を陽動する作戦だった。へりの横にへりの操縦をしている生徒からの熱源反応を感知したと報告を受け正人が確認する。窓に映ったのはバトルスーツに身を包んだ龍だ。その反対側に羽音を立てる哲が居る。その後、さらに作戦を続けた。敵間はそこまで広くないため今は彼らの搭乗機意外は近隣の基地に待機させてある。もちろん哲や龍も異能を保持しているというが『人間』という際を超えることはできない。そのため能力の使用にはスタミナや何らかの代償を払うのだ。特に哲の場合は彼の一族的な特異な体質でなければできない体の変化……。それをするには寿命を削る。彼の一族は研究の結果から寿命が他の人間の三倍から六倍はある。だから、使える能力なのだ。龍の場合はもつと特異だ。体から炎を噴出し纏うことができる体は熱に強く熱循環やエネルギーの効率が科学の際を超えている。未だ解らないことだらけで

はあるが『スタミナ』の消費は免れない。疲れさせないために休息も作戦に含んでいるのだ。

「敵の戦艦はレーダーに感知される限りでは小型攻撃艇が三艇、中型砲撃戦艦二艇、空母だ。俺と『鋼鉄軍女』は最後尾の空母に奇襲をかける。後続二機は龍が小型舟艇を鎮めるのを補助した後に戦艦を占拠しろ。最後に哲の誘導を受けて迂回したら敵の戦艦を奪うんだ。そこからは哲の指揮に任せる」

作戦の全容は島の形態を理解したものだ。軍部の生徒に気を利かせ実は他の離島に駐留しているこちらの大型砲撃艦三艇と中、小型の攻撃艦を島の裏に隠し戦闘機をレーダーに探知されないように協力的なジャミングを使った上で放ち敵を包囲していたのだ。途中で打ち合わせ通りにヘリのメンバーを入れ替えレイと二人でヘリに乗り込んだ。

「どうして護衛まで断つたんだ？」

「俺の素性が知りたいなら他言は無用だ。俺の能力ちから単純には体得した力はこの世の中では特別な物なんだ」

「どんな能力ちからなんだ？」

彼が操縦する中で説明しだす。彼の力は……政治的、宗教的にも大きな問題をはらんでいた。彼が隠しておかなくてはいけない力のため彼女と数人の気の置けない友人にしか言伝手いないのだ。彼が無線を受けているため言葉を止めている。無線機を置くと手の甲のいつもグローブを付けている手からグローブをはずし見せながら言う。

「で？」

「単語だけでもこれは厳しいんだ。『パラディン聖騎士』って知ってるか？」

この紋章にも見覚えがあるはずだ」

「『パラディン聖騎士』だと？」

「義祖父がその職についていたんだ。だが、『墮ちた聖騎士』だかな」

「どついうことだ？ 1997年に起きた僧院の教皇の崩御……あれは俺の義祖父が殺したんだ」

「ま、まさか……な」

「事実だ。俺の義祖父は教皇の暴挙に憤りその首をはねたんだ。俺に教えてくれたのは俺が七歳の時、それから俺は『聖騎士』になるために自ら鍛錬を積み今に至る」

『パラディン聖騎士』の歴史……過去、二回の大戦中に政治的混沌に光を導

いた英雄としてその血や伝統が密かに受け継がれている聖なる血統として世界には好評されている。その伝承はさまざまだ。一番有名なものは第一次世界大戦中に聖なる夜の中兵士をまとめ上げ敵味方を問わず神へ忠誠を尽くす者の身を救ったと言う。第二次世界大戦ではそんな聖人のような一面を覆し戦線的な面を持つ。白銀の鎧に身を包み聖剣を握りスターリンググライドの攻防戦において敵の戦車をねじ伏せていると言うのだ。彼がそんなことを口早に型す中、ヘリ部隊の最初の彼らが敵の射程範囲に入り攻撃が始まる。彼がいうには人為的に射撃は行われていないという。弾道が明らかに機械的すぎると言うのだ。そして、レイにヘリの掴むバーを掴ませ恐ろしく荒い操縦を始めた。敵の砲弾と機銃掃射を掻い潜りながら敵の近距離まで詰め寄るが……。

「レイ！ バーを離せ！ 早くするんだ！」

ヘリが撃墜されたのを合図に龍と二機目が隠れていた場所から飛び立つ。今回の作戦では敵の夜襲で戦力が解らないため通信を基本的にジャミングしている。そのためこちらにも秘匿回線以外は使用で

きない。しかし、こんな小規模な戦闘でそこまですることはまずしてはならなかった。だから皆がそれを理解し、あえて二人の安否を確認しなかったのだ。哲の部隊には彼三種類の発光弾が渡されている。敵の陽動が見られていた場合、敵の完全投降、殲滅を意味する発光弾だ。

「まったく……ギリギリだな」

「いつまで抱いている気だ？ もう、敵地の真ん中なのだぞ」

「よく言う。作戦中に放心しやがって……。小柄だったから良かったものの」

彼女を下ろし作戦の進行を確認した。龍は炎を体から噴出させているため光を強く放ち目立つ。それに機銃や砲火が集中している間に彼らは艦船の内部に侵入した。彼女の愛銃を太股のホルダーから抜き取り構えてかなり敵しい表情だ。それもそのはず……。敵の艦船内部には彼らの侵入を予め想定していたかのような大量の監視カメラや無人の迎撃装置があったのである。しかし、正人はまったくどうじない。

「『鋼鉄軍女』は俺の背に隠れながら後ろの見張りを頼む。小柄なお前なら弾には当たらんだろうが後ろからの攻撃には注意すべきだ」

言われるままに後ろに隠れるように二丁の拳銃を構えて正人の背後についた。敵の無人兵器の放つ銃弾が次々に正人の刀によって切り分けられガトリング式のそれらも前に急前進した彼に切り分けられ破壊されていく。その動きを見ているレイとともに敵の司令部にたどり着いた。そこには予想通りに人の影は見当たらない。この艦船がオート操縦で空になっているということとは……。

「エンジンの爆弾が仕掛けられているんだろうな」

「は？ 何を根拠に……」

「いや、可能性にすぎないがこれも捨てきれない。今、操舵室のシステムは俺の知り合い達のクラッキングでシステムが崩壊しているはずだ。いずれ止まる。だから、わざわざ俺達が『囿』になったんだよ」

「まさか……」

「ああ、俺の見解では三つの選択肢に敵は動くと言ったんだ。敵の奇襲部隊を今頃、哲の部隊が撃破したところだろう。こちらの司令部を狙い貴正^{たかまさ} 政都^{せいと}教官を狙うのが定石。しかし。敵はあることが砲撃艦を数隻用意し包囲されているにも関わらず通信や交渉の動きも見せなかった……だから、安易に予想できた」

「しかし、それが外れていれば今頃私たちの仲間が……」

そこに哲からの連絡が入った。発光弾は敵の奇襲と陽動を同時……どうやら敵も考えたらしい。敵の機動部隊はこの軍艦に帰還し体勢を整え各地に自爆を目的に機材をそろえて飛び立とうとしているらしい。ならば……こちらも向かい打つまで……と彼の動きがいきなり機敏になる。次々に帰還してくる機動兵やヘリの部隊。案外と敵の数が多い。そして、彼が動いた。

「お前は後方からの援護射撃を頼む。俺の刀さえあればたいいの武器は効果を上げない」

「解った」

甲板に集まる敵の兵団に突っ込んだ正人。龍の部隊はヘリに銃弾を数発撃ち込まれ龍のスタミナも限界に近いたため一度帰還。もちろん、哲の誘導した奇襲に奇襲をかける部隊はついでに行方不明の二人を回収しているためこれからの即時展開は不可能。応援もジャミングの関係で哲のように発光弾をもって居ない正人とレイの二人では何ともできないのだ。だが、無茶苦茶なことをするのが得意な正

人の持つ刀で……。

「遅い……」

敵のへりを一刀両断し撃ち放たれる銃弾を腰から抜いた二本目の日本刀を駆使し全て弾き落とすか流す…… または、当たっている軌道なのにあたっていない？ 敵の攻撃に即時対応する程度の速度では勝てない。だから…… 何らかの体得した異能ということとなろう。

「な、なんで？ 銃弾が……」

「『アブソリュートブレイカーエリア絶対的破戒空間……』」

彼のよくわからない言葉で周りに白い空気のようなものが現れ銃弾や刃物、炎が全て弾かれる。加え刀には白い気が纏われ長さや強度、他の付属事象が加算されている。彼、正人が体得した『パラディン聖騎士』の実質的な力。それを公表されている程度の知識で説明すると彼らが操ることができるのは『とっさ闘氣』と呼ばれる人間が発する感情の延長線上にあるそれを体内でエネルギーとして増幅し大きくしながら纏う物だ。しかし、あくまでこれは公共に公表されていることでありそれが事実かどうかは解らない。加え彼は明らかに他の力を使うように刀から『とっさ闘氣』を放ったり体中から『とっさ闘氣』を集中させるなどもしている。彼が敵の機動兵を次々に切り捨てるなか…… 彼の背後、一段高いところでうめき声が聞こえて来た。どうやらレイが負傷したらしい。とっさに彼は半数以下に激減した敵を撃破するのを止め飛び上がりレイを抱き上げ何らかの処置をすると海に飛び込んだ。敵も予想外の展開らしく機銃を海面に向けて放つ者もいたが……。

「俺の教え子に手を出して……。生きて帰れると思うなよ？」

敵の軍艦の上に黒い影が現れ敵の兵士が一瞬で蹴散らされた。それから彼は一瞬で居なくなり……その夜の騒乱は幕を閉じたのだ。死者零名、負傷者四名、設備被害、小型舟艇二隻、ヘリコプター一機。そして、その夜に緊急手術が行われ何とか一人が命を取り留めた。その病室には正人が剣の手入れをしながら座っている。

「うっ……。此処は？」

「気づいたか？ ここは軍部の緊急搬送センターだ」

「うっ……」

「喋るな。心臓の真下と二か所を損傷してるんだ。呼吸することだつて厳しいだろう」

それから数時間し彼が部屋を出ていく。そのまま彼はその夜は帰ってこなかったようだ。翌朝になり教官達と共に花束を持って何事もなかったかのように病室に入ってきた。その彼を見ているが教官達は彼女に気を失っている間の彼女の動きを伝えている。どうやら彼らは彼がどうしてこの学園に呼ばれたかを知っているらしく『ラティン聖騎士』の単語を何気なく話している。

「意識が戻って何よりだ。水無月元帥」

「貴正……。ここで他人行儀はよせ。コイツもそんなキチキチした中では話しづらい」

「済みません」

「いい、気にするな。昨日のことは大体を県から報告してもらった。君に起きたことそして傷の箇所や応急処置は大体彼が処置してくれていたから結果的な推察として命を取り留めたこと……いろいろと話は積る。……が。今回は君や他の学生に急きよ集まってもらわなくてはならない」

昨夜、彼は能力の一部を使い彼女を救ったらしい。軍艦の縁から

身を投げ海水の中を泳ぎながら彼らが助かったのも彼が異能を体得していたからだ。そして、彼女が何故不覚にも銃弾を受けたか……それは事故とってしまえば一言だが詳細として伝えるのえあればとても複雑だった。こちらのシステム科の学生が敵の砲撃艦内の無人警備装置のシステムを弄ったときにミスをしてしまい機能を回復し……彼女の背後から数発のガトリングの銃弾が当たったのだ。幸い対人用の兵器だったため危険水域にとどまり即死は避けられた。それに加え正人の機転の効いた攻撃でガトリングのコンピューターと接続しているコードと金具を波動のようなものでたち切ったのだ。それにより彼女が被弾したのはたったの九発。心臓の真下に一発、右肩から肘までに二発、右の太ももに二発、左右の脇腹に四発。計九発。全て摘出され傷も心臓の真下の物以外は綺麗にふさがると言う。しかし、心臓の真下の物は……。あと数ミリずれば命を奪いかねなかつたらしい。

「運のいいやつだ」

「ふん……。だが、助かった。礼を言いたい」

「素直に言え。それから、お前も前線にでるなら防弾装備くらいしておけ。今回は対人用の兵器だからよかったが……お前のように対戦車ライフルを人間に向けて放つ用な輩が居ないとも限らないんだからな」

「人聞きの悪いことを言うな」

「だが、事実だ」

「お前だって何なんだ。あの力は……私の知識では『パラディン聖騎士』には人を治癒する力はないはずだ。だが、どうやって……」

彼がそのことについて口を開いた。彼の力『パラディン聖騎士』の『闘氣』とは空間や対人に作用する物らしく彼の意思でどうとでも成ると言う物だと言っていた。攻撃性、安定性、防御力などが完全に調和しているのだ。それを応用したに過ぎない。彼の掌には誓文と呼

ばれる金色の古代文字と十字架の描かれた紋章があった。それを見るだけならただ単に張られているだけ……または、刺青などにも見れる。しかし、レイがそれに触れようとすると結界のような物に弾かれすぐに手を引つ込めた。蒼い瞳が驚いている。それもそのはずだ。この世界には確かに魔術や魔法と呼ばれる物は多く確認されている。……だが、おかしなことに彼には魔術も何も反応はない。それが強力な結界風の何かを保持しているからだ。

「お前……まだ、気づいて居ないのか？ お前も既に俺達の仲間入りなんだよ」

「私に何か起きているのか？」

「お前には俺と同じく強力な異能が感じられる。狩りにだが俺が能力でお前を治癒できても……簡単にはお前は助からなかったろう。異能……俺の知識では本当にお前は『アイアンメイデン鋼鉄軍女』になってしまったんだ」

「嘘をついても意味はないか」

「ああ、俺もそうだったように突発的に体に習得することが多いんだ。人間は生命力の限界を迎えると危険を察知して特異な力をその身に受けることが稀にあるんだ」

異能を習得する。その間に彼はどんな経緯を持っているのか知らないが彼は多くの修羅場をくぐってきてきているらしい。手の甲には誓文そして、異質な性格と立ち振る舞いなど……。それを数日だが見ている彼女にも『こちら側の人間』になったのだと理解したらしい。強力な異能を体得するにはそれ相応のリスクを伴い体にもダメージを負うのだ。特に……例をあげて一番負担があると言えば龍だ。彼女も由緒ある家柄の出であり『焰群家』の血統。そして、異能の中でもトップクラスのレベルを持っているのだ。

「で？ 何でお前は俺の秘密基地に居るんだよ」

「お前はまだ理解できんのか？」

「何をだ？」

「マア……いい。私の心を理解してくれるまで私はお前に付きまとうからな」

鳳焰美鳥

『アイアンメイデン』 鋼鉄軍女』 こと水無月 レイが彼に近く生活するようになると彼女の生活も一変した。この学園のシステムはいろいろと複雑なところがある。学部により転学や併学もできるのだ。『焰群 龍』… ∴彼女が軍事科武術機動学科に転学してきたのだ。彼のいる武術機動選択は簡単には影の学部と呼ばれ隠密、暗殺、特殊情報技能などが問われるスパイ諜報のようなことをするところである。そのため学部自体に人数もそこまで居ない。数人のメンバーが異能と屈強な身体能力を基礎にしたスパイの先輩に教えられているらしい。教官すらその道では恐ろしく名のとどろいた人物で数ある戦場をくぐりぬけた人物だったのだ。

「県……お前そいつらは何とかならんのか？」
「成りませんね」
「そうかい」

龍は『焰群家』と呼ばれるとても古い血筋の末に当たる人物でその家は武道の大家らしい。『鳳蓮戯』と呼ばれる強力な技の乱れ打ちによる乱舞を得意とする攻撃形態をとる。そのため、並の人間では手出しさえできないのだ。それに加え龍の恐ろしいところは……。その体に備わっている高い身体能力などがある。炎を噴き出すこと意外にもその極度に柔軟な体に鍛えられた筋肉など。細い体に見合わない力……。そこが恐ろしいところだ。

「へえ……。正君を横から奪おうとする泥棒猫……。私が成敗するんだから！」
『アイアンメイデン』 鋼鉄軍女』 起動……」

そこに居たのはメリケンサックを付けた拳を構えるレイと本来、解放を許されない域の力を微量に解放した龍だった。彼女らに何があつたのかは知らないがレイは軍事化軍基兵科から兵学を申請されこちらに委託された形らしい。そのレイの反応が気に入らないらしい龍がくつてかかったのだ。

「ヤアア！」

「フツ……」

レイは龍の攻撃を避けようとしない。むしろ体に受けた方が龍にダメージが当たっていた。彼女の『アイアンメイデン鋼鉄軍女』は完全無効化機能だ。発動している間は何をしても無傷である。ただし、攻撃の最中は一部の解放を解除しなくては未だに動けないらしいが……。それでも、配置された当日から面倒を起こした二人を周りの生徒は啞然と見ていた。

「……………」

彼らの学部である武術機動の授業は大体軍事科の横で数人の人間を伴い、ひっそり行われる。大概是数人で組み手を連続して行うことが昼間の実習。残りは夜間の戦闘実習だ。少ない人員を二組に分けて行う対抗戦で大体は正人と残りの全員と言う構図である。

「おいおい、道場が持たねえぞ」

「ですね」

「『ですね』というくらいなら止めるよ」

「解りました」

「できるなら早く行け」

レイの覚醒した力。『アイアンメイデン鋼鉄軍女』は先程も説明したが体を高質化

しあらゆる攻撃を使用時間内、及び使用部分のみ無効化できる力だ。龍の炎ですら受け付けないその力と龍の……熱源であらわすなら溶鉱炉並の温度を持つている拳がぶつかる寸前だ。彼はどうやったのか二人の間に滑り込み『闘氣』を掌に集めて衝撃を吸収し、そのまま動きを停止させた。

「え？ え？ え？ えええええ！？」

「何だ、龍」

「ど、どうして火傷しないの？」

「俺の異能を使ったただけだ。ただし、体得した異能は異能とは呼ばれないがな」

それから教官らしき男に指示され二人を伴い外にでる。二人が正座させられ教官に説教を受けているらしい。正人はなおも刀の素振りをしている。そこに教官が言葉を添えて正人に二人をあまり頻繁に使われない異能者専用の訓練施設に案内させていた。覆すようだが大勢では使用せず彼がよく使用するらしく、そこには無数の切り込みができていた。そこで彼は頭に補助具を付けていつにもなく『闘氣』を集中し臨界点と思われるところで持続を続ける。此処の使用の仕方を知らない二人は完全に出遅れては居るが各々にやることを見つけたらしい。

「お前ら……何で喧嘩したんだ？」

その時、大きな影が飛来した。

「お前鈍すぎだろ」

「哲か。何時来たんだ？」

「三秒前」

「そうか。なら、いつものを頼めるか？」

「おう、俺の訓練にもなるしな」

興味津々の龍とレイ。此処は一応屋外で岩山と何十メートルもある木が生い茂る天然の城塞が囲んでいる……さしずめジャングルのような場所なのだ。そこはどんなに彼らが暴れても……。いや、限度はあるうがそこそこならばあまり目立たないエリアなのだ。正人が刀を納め近くの機材が管理され保管してある施設に置いてくると目隠しをし拳に『鬪氣』を纏わせる。それに合わせるよう哲も目隠しをし体を変容させた。

「そう言えば、名前は？ 泥棒猫」

「マナーとしては先に名乗るべきだろう。私は水無月 レイ。正人には『鋼鉄軍女』^{アイアンメイデン}と呼ばれている」

「そう、アタシは焰群 龍よ。一応言っておくけど……」

「何を考えているかは知らんが私は泥棒猫ではない。確かに奴を好いては居るが……盗んでいない」

そんな会話をしているような場所ではない場所で会話をする二人。膝を抱えて座りキチンとした戦闘服を着てきたレイとピツチリくるバトルスーツを纏い足首まである膝や足に特殊な補助具のついたストッキングのようなものを履いた龍。そんな二人の目の前で拳と拳がぶつかる恐ろしい音が響く。哲は体を変容させる変容系の異能者だ。体には岩のように高質化された鱗が張り出し腕力はゴリラをも凌駕する、速度はチーター並とも言えはいいかそんな彼に追い付ける元常人の正人も人間ではないだろう。ラツシュの繰り返しが続くなか……最後に重い一発が双方の拳にぶつかり二人が弾きとんだ。

「い、生きてる？」

「大丈夫だ。二人とも生きてる」

「ふう、哲。大丈夫か……よっと」

「ああ、大丈夫だよ」

そこからは自分もと楽しそうに志願した龍と正人の勝負になった。龍の実力を知っているのは彼だけなのだ。右手に紅い炎、左手に鋭利な形状になった蒼い炎を彼女が纏う。そして、壮絶な体技のぶつかり合いが始まる。先に戦闘のデータを上げれば、龍には大げさに聞こえるかも知れないが熱的な観点だけなら核爆弾すら軽傷にもならない。それが解っている正人は遠慮なく自分の黒い刀を抜き払う。その刃に何かをつぶやきながら一筋触れ、白く光りだしたその刀を一振りし鼻筋に翳した。その瞬間に家紋が変化する。一本の筋が残りの三本よりも長い……十字架。剣の形すら形状を変えその長さも長くなる。

「聖剣アンビション……使用者の心を弔え」

龍の恐ろしく速い体技には視覚では反応しきれない。彼はそれを補うために感覚を恐ろしく研ぎ澄ましている。彼女の炎は本気を出せば岩石とて一瞬で溶かす。それが刃に当たっているのに彼の刃は溶けることはなかった。刀で彼女の拳をはじき返し反対に握っている刀で切りつける。しかし、全く当たらず最終的には彼が力を落とされている関係からすぐにけりがついたようだ。龍の拳が彼の右の頬を打ち、正人が吹き飛ばされた。

「大丈夫かよ。お前、力の制御で威力を落としているのは解るが」

「仕方ないだろう。誓文が……」

「その先は言うな」

背後に最初に現れた教官とは違う筋肉質な男性の教官が現れ彼の手をつかんだ。レイがそれを驚いた調子で見つめている。それに気付いているらしい教官が渋々話だした。初めて話しているはずなの

に彼の秘密について知っていることについて疑問をもっているらしいがそれにはあえて触れない。

「しかし、お前。力が制御できなくなっているんだろう。気をつけろ」

「はい」

「それから、焰群のお嬢は気をつける。お前の力は制御を間違えば大惨事ですらすまないからな」

「その時は俺が沈静……」

「お前はあまり無理をするな。誓文の副作用は恐ろしく体を蝕む」

教師の暗い顔を察した三人も黙る。この教官は異能を持つ者を専門に教える教官のようだ。片目には黒い眼帯を付け、片腕には大きな斬られた傷が目立ち、声は男性にしては割高ではあるが深みがあり恐怖を持たせるような威圧感もそれには含まれている。

「新しい仲間が増えたところで前々からいる他はいい。二人は自己紹介してくれ」

「は、私は水無月 わたくし レイ元帥位であります。今回この場所に誘致されたことを誇りに思い……」

レイの堅苦しい話を聞き皆が拍手をした。この場所に新しい仲間を拒む物は皆無に等しかった。特に異能を保持していれば皆がそれを快く保護し友人として仲間になりたいと思うのだ。ここは……教官を含め訳ありな過去を持つ者が多い。特に後天的に異能を受けたものは皆に優しくされる。先天性の異能者は皆その扱いが解っていたからだ。加え……彼らが今後、普通の人から受けるであろう扱いを皆が考えていたから……と言うのもある。

「はじめまして、焰群 龍です」

やはりとも思ったがこの名前が出ると皆空気が変わる。特に、彼女もはや気にしてはいないが『焰群』の名の意味するところは絶大だ。『焰群家』は過去の第一次世界大戦からの強固な血筋で大日本帝国時代の最強の血筋でもある。ミッドウエーでその代の頭首が討ち死にした時より戦争改革からは脚を洗い。武道の大家、そして大きな製薬会社として成長。そんな彼女はお嬢様でもあるのだ。ただし、彼女自身はそれをあまり好んではない。だから正人と哲もその話には触れないというところだろう。周りもクラスの核を担う二人の意向に反することはしないらしい。むしろ、彼らはそれの一つの形として認識しているようだ。

「よし、親睦も深まったことだ。お前らに話しておく。今日の実習は別のことをしたい」

「……………」

「よし、まずは三人一組になってもらおう。確定者だけ此処で言うておくことは……『パラディン聖騎士』につくのが『アイアンメイデン鋼鉄軍女』と『フェニックス鳳焰鳥』というのは決定事項だろう。コイツにつけば多少のことなら止めてくれるだろうし、二人とも技術の判定では『S』ランク級のメンバーだからな」

此処にはいろいろな能力を扱う者たちが集まる。水、風、氷、炎、空気、岩、砂……あえて言えば何でもあつた。人間的な者だけとは限らない。変身する物も少なくはないのだ。そして、ランクという物が存在する。S、A、B、C、D、Eと段階があり彼らもそれに合わせたような訓練を受けているようだ。言うまでもなく最高位は『S』ランクである。

「解りました。では……………」

教官の相図で次々に生徒は散って行く。本当に様々な能力で散りに分かれていくようだ。その中でもやはり能力を使うのだ。地面に水のように吸い込まれたり空気に溶けるように消えたり一番恐ろしいのは正人だった。瞬間転移などではないが体を弾き飛ばすように彼女ら二人を置いて行く。

「全くアイツは……ほら、二人とも逃げ」

「はっ!!」

「わかりました!」

二人が急いで彼の後を追う。レイは肉体的には最高質の物をもっている。龍は補助具ぬ炎を集中させ空中を滑空しながら途中で追いついた。その瞬間、二人の前に立って何かから二人を守った。能力を解放していなければ特にレイは生身同然なのだ。守ると言うが……簡単にはバズーカと思われる弾を切り捨てたらしい。森の奥で爆発を確認し彼が指笛を吹いた。すると教官一同が全員集まり正人に続く。……が。

「まずい! ナパーム弾だ!」

「はあ!」

「正人! 無理だ!」

「私が行きます。皆さんを後ろに!」

龍が前に飛び出ると炎の壁が現れ次々に降り注ぐ油の種を消していく。そこから……彼女は暴走を始めた。敵の弾幕の数が恐ろしく多すぎたのだ。爆破に炎の噴出頻度が高くなればなるほど彼女の炎がいびつに揺らめき……急に爆発した。それを守ったのは教官の男性だった。白金の白い装飾がきらびやかではあるが無骨なハルバートを振りかざす教官の男。そのまま正人とレイ、哲を引き連れ残りのメンバーには他の近隣寮生に避難を求め動きを早急に伝えていく。

途中で……四人の内の一人が炎で打ち飛ばされ近くの林に消える。
とっさに『鋼鉄軍女』アイアンメイデンを解放し防衛はしたのだろう。破壊力は抜群、足場も悪い、吹き飛ばされて当然だ。

「うわっ！」

「くっ……まあ、あの防御力なら跳ね飛ばされたただけだろう。お前、確か『鳳焰鳥』フェニックスとは旧知の仲なのだろう？ 力の詳細が解るはずだ」

「はい、鬼神教官は近づかない方がよろしいかと」

「恐ろしい攻撃力と見た。しかし、お前が戻れなくなるかも知れないんだぞ？ 俺が知らないはずはない。先代『聖騎士』パラディンのことを知っているんだ」

「解っています。ですが、あなたもそうでしょうか？ 聞きました。」

先代『聖騎士』パラディンの宿敵にして最高の理解者……『破壊者』ディサスターも、いや……あなたの方が厳しいはずだ」

「ふん、お前は誰に物を言ってるんだ。俺がどうして此処でお前らを教えていると思ってるんだ。俺は元々人間ではないしお前のようなリスクを伴う程の経歴や能力的欠落もないんだ。俺は爺さんに雅の嬢ちゃんとお前を養うと約束した。俺は死んでも守らにゃならん」

二人の過去の断片に触れ海岸沿いで立ち尽くす彼らが居た。特に彼女の力を深く知らなかった鬼神教官が物を言えずただ、正人の言葉聞いてる。敵は今回、湾内に進行せず大型の砲撃艦を数隻と中型、小型の攻撃艦を待機させていた。だが……その戦艦軍は一瞬で龍の放つ蒼い炎と紅い炎の入り混じるそれに薙ぎ払われ全てが爆沈している。しかも、そこには紅蓮の炎が舞い上がり下手をすれば周りの島に被害が出そうな勢いだったのだ。

「龍は自己防衛本能が極限に達すると彼女の意思に関係なく炎が体を包み危険とみなされた全てを飲み込み灰燼と化すでしょう。先回暴走した時は人的被害はありませんでしたが……山一つ、山一つが

丸ハゲになっています」

「そんなバカな……だが、生きているのか？」

「ええ、生きてはいますよ。本人は昏睡状態で眠っています。よく見ると炎を噴き出す物の中心には彼女を包むように小さな火炎球がありますよね？ あれは彼女の防衛本能の塊……俺と哲は『卵』と呼んでいます。彼女は彼女の両親曰く『未覚醒状態の卵』だそうです」

ハルバートを強く握る鬼神に向かって炎の一閃が飛んだ。それを何とか受け止め彼の力らしい物を解放し正人の前に立つ。

「お前に死なれるわけにはいかん。此処は俺が……」

「無理ですよ。貴方には絶対防御能力はないでしょう？ 此処は俺が行きますよ。お願いですから早死にしないでください。もう……知人に死者を出したくないんです」

「おい、それはどの口が叩く？ お前は……おいおい、解った……お前と剣を交える気はない。はあ……全く、変なところだけ似てくれた。有無を言わせぬ殺気といい両極端な決定方法。『生か死』しかお前にはないのか？」

「ありませんね。この剣に誓って」

正人が剣を構え海面を走っている。龍の炎は大蛇のように頭をもたげ次々に彼を襲う。そのたびに海面へ体を沈め再び浮上しじりじりと近づいて行く。火炎球は治まるどころかささらに大きくなり外側にいた鬼神すら危なくなってきた。鬼神の目の前に『鋼鉄軍女』アイアンメイデンを発動し会えに立ちほだかる。

「申し訳ありません。盗み聞きをするつもりはなかったのですが……

……つく……！！」

『アイアンメイデン 鋼鉄軍女』！ 無理をするな！」

「一度引きましょう！ それから私は水無月です」
「解った……」

次の瞬間に正人が哲と話しておいたように手筈が発動した。彼が炎を遮断し内部の龍のみを抱きかかえ海面に水没したのを合図に海面ギリギリに透明な結界が発動され動きを見ている。炎はやはりそれを破ろうとするがそれに追い打ちをかけるように結界の上に巨大な冰山をつくり……炎を一時的に凍結させ動きを鎮静化したのだ。それを待っていたように龍を利き手と反対の腕で抱く彼が『聖剣アソビシオン』と呼ばれたそれで縦に斬り裂いた。

「まさか……此処までやる奴だとは」

氷、炎、結界を三つとも砕き小さく粉じんのように舞い上がった。それらが周辺の町に雪のように降り注ぐ。珍しく笑顔を見せる……。綺麗な、幻想的な夜が明ける中キラキラ輝く粉じんを浴びながらとつさに防衛してくれて暴走した龍を病院に運び全員で見まいに行く。龍の意識が残ると最後まで残っていたメンバー以外は皆眠りに帰る。そんな中、一人、病室で倒れてしまった。

「無事で……」

「おっと………つたく無理をしやがる」

「正！」

「大丈夫だ。副作用だ。薬……失敬、相応の手当てと処理をすれば意識は戻る」

「先生」

「どうした？ 焰群」

「正君は……いえ、私に何が？」

「覚えていないのか？」

「はい」

それから数日し、武術機動の学生が全員そろった。その時に言いにくそうに龍が「ご迷惑をおかけしました」と言ったが……周りの学生達は誰も咎めたりする気はないらしい。その日は本調子でない人間も数人居たため授業は開講せずに諸連絡程度で事は済んだ。それから最前線に現れたメンバーだけがその場に残り話し合いになる。何故か外傷が無いはずの正人が体中に傷を負っていて松葉杖と包帯ぐるぐる巻きの満身創痍状態で現れたことも周りに告げられた。

「だが……これからもあれは厳しい。俺や県がいつもお前についてやれる訳でもない」

「そうですね。私もそう認識していましたが」

「わかっている。仲間のためだ。俺だってバカじゃない。あのタイピングが解らなかつたとでも？」

龍がうなだれると鬼神教官の視線は恐ろしい物に代わり正人を強く睨んだ。彼はやはり彼と過去に何かあるらしい。そこに居るメンバーには既に話しても問題がないという判断ができてはいるが何度苦言を呈したのか知らないが聞かない正人にさらに灸を据えたいらしい。とくに今回緊急に呼び出された二人にわびながら正人と自分とこれからの龍について話出す。

「このバカのこととはさておき。嬢ちゃんを守る手だてを考えなくてはならない。それは此処にいる全員が合意してくれると俺は思っている。だから、という俺の判断基準で俺は世界レベルのトップシークレットを此処で語ろうと思う。そこには此処に居る全員と残り二人がかかわってくるだろうが……理解してくれ」

鬼神教官の開いた内容は信じられない世界の勢力図と何故彼らが緊急に彼らのようなトップシークレット級の特殊な人間を此処に集

めたかを明かす物だった。簡単には漢字二文字であらわせる『戦争』だ。この世界は現在大きな戦力に割れている。この島は世界連合が確立した学園城塞都市だ。それを抑えようとするように『僧院』と呼ばれる大きな組織がたびたび攻撃を仕掛けてきているのだ。政治的にも実力的にも既に圧力はかかってくるという。そこで、かわってくるのが『県 正人』だ。彼『僧院』が欲しがらるキーマンでもとも欲しかった人物だった。それを引き込む原因を作ったのが『鬼神 悠人』教官だったという。彼は元僧院の重官だった。その彼が彼を引き取ることで国際連合の役員に言葉を告げて此処に入る決断をさせたのだ。

「あ、あの、何で私も関係するんですか？ 僧院には私は関係……」
「あるんだよ。これは宗教的なことだが……」

僧院は一神教の宗教派組織だ。それを毛嫌いする組織が存在する。仏教連だ。仏教には流派はあれど多神教という考えを作り出した今日この頃……。そして、彼女は仏教連の管轄になっている。何故かと言えば彼女の祖父が仏教連の理事の一人なのだ。その関係で彼女はすぐにそちらで引き取られた。……ということらしい。

「わ、私の家系まで……」
「それだけじゃない。『武 哲』は宗教関係で動いている。賢武園はアジア圏の宗教に流通し人の動きを管理できた。その動きの関係で仏教連と組み『僧院』を出し抜きたいんだ」
「知っていたんですか？」
「当たり前だ。俺は此処の管理責任者の一人でありお前らの指揮官の一人でもあるんだ」

前から知られている三人の最後はやはり正人の詳細だった。彼については一番鬼神教官に知られている。彼の手にある誓文を手首を

つかんで周りに見せた。所見の二人は解らないらしいがそれを前に見たことのある三人は息をのんだ。確実にそれは彼に根付き広がりを見せている。そして、鬼神教官が革のジャケットを脱い体を見せた。体中に彼の誓文にた物の線が張っている。しかも、それは体にまとわりつく何かのように……動いていてはないか。龍がそれに小さく悲鳴を上げて目をそらす。

「ひっ……」

その反応から正人以外は二人を残してそこを去った。実は龍と正人はかなり昔からの中なのだ。哲は途中からということ二人の中に割って入ることはしない。レイもその空気を読んで大きく舌打ちするも哲に続き分けも解らぬまま三人の情勢を聞かされた二人に説明するために他の場所に移したかった鬼神教官もそれを目で伝え二人を連れ出す。最後に残された二人は……いや、龍だけではあるがかなり恥ずかしがっていた。

「正君も……『あれ』あるの？」

「ああ」

「何で、教えてくれなかったの？」

「……お前には関係ないだろう」

「そうだけど。心配だよ」

「あ、ん？ いや、心配には……」

龍が正人に詰め寄り……手を握った。龍には龍の不安がある。『ちから能力』は持っている人も不安になるのだ。下手をすれば自身の命すら奪いかねない状況……。それを持つ者としては教官もあるからだろう。

「ダメ……だよ。正君居ないと私生きられないんだから」

「いや、そこまでじゃないだろう?」

「そんなことない。私の心のよりどころは正君だけなんだから……」

正君居なくなったら。私、生きられない」

「おい」

「私、決めた。絶対に離さないよ……。正君は私が守るんだから」

聖刀騎皇

木刀を振る彼の横には三人の人間が居た。監視の役目を任されたレイと龍、哲だ。レイは冷静沈着な性格で考察するには一番効果が挙げられる人間だからだ。性格で言えば哲は粗野すぎる。龍は心配過ぎて深く首を突っ込みすぎるからだった。龍とレイは何故か目を合わせるたびに喧嘩をする。そのため龍よりも簡易格闘では実力のある哲が『二人』の監視についているのだ。

「お前、体は大丈夫なのか？」

「至って健康……ウグ」

「どこが健康だ。私が見ている限りでは貴様は全く健康ではないが」「それは私も賛同するわ。だって、正君はもつと軽い動きをするもの」

彼は苦い顔を見るとトレーニングスーツを脱いで汗をぬぐう。その瞬間、目ざとく見ていたのは……流石は『親友』の哲だった。実は彼は寮を同じ寮に変更していたのだ。そのため、彼の誓文の変化にも気付いていた。彼の刀を先に取ると厳しい口調で言葉を継ぐ。

「お前、約束してくれないか？」

「何を？」

「俺がお前のことで解らないことがあるとでも思うか？ 何年お前とつるんでると思うてる。辛いんだらう？ もう、見てらんねえよ。体がぶっ壊れる前に……」

「忠告は聞いている。だが、……」

そこに鬼神が現れた。

「そいつをよこせ。武」

「はいっ」

「おい！」

剣を奪われた正人がすぐにその場からいなくなる。鬼神教官がため息をつき女子二人に追いかけるように伝えた。その後、哲にだけ彼の本当のことを告げるといい彼の隣に座り刀に特殊で一時的な封印を施して自分の眼帯を外す。日本人ではあるが……彼は少し特異な顔立ちをしている。顔は綺麗に整っているのだが、恐ろしく目が細いため怖い。見た目はカッコいいという部類ではあるが……。眼帯の中からは真っ赤に燃えるルビーのような瞳が出て来た。右腕のガードグローブをはずすと彼にとって恐ろしい物が現れる。まあ、哲はそこまで気にならないが……。彼はとても気にしている。

「まあ、お前にはいつか語ろうと思っていた。俺は奴に一人で惨い罪を負わせたくないだけだが」

「惨い……罪？」

「お前も知っているとは思いますが先天的な異能は血筋や血統などでは確実に現れる形質なのは既に生物学上知れている。しかし……だ。言っておく、俺や県のように後天的な能力を持つ者は大体が危険な過去や思い出したくない過去の体験、肉体的ショックを消したいと思つ心的防衛反応や肉体的防衛反応が引き起こすんだ」

正人もそれらしい。まずは、教官のことから始まった。彼の場合には異質と言えども異質だ。彼の出生としては本当に……モルモット酷い。彼は過去を言ってしまうのも苦しい単語だ。『人体実験の実験検体』モルモットだったらしい。人として扱われたのは20歳を超えたところからだ。たと言つのだ。彼は人間以外の生物として定義されるような物を持っていると自白した。

「俺は『実験検体』^{モルモット}だった。その時の記憶を抹消し消し去りたいがためにそういう研究所を破壊して回ったよ。俺の場合は後天的に自分の精神を守ろうと体が反応した異能……『付属機能』^{アヒレリテイ}だ。アイツもそれに関しては例外ではない」

哲は軽いムードメーカーな性格と重いを真摯に受け止めることのできる二面性のある人物だ。彼の過去を聞いても真剣に口を開かずにはいた。自分の教官が体験したことを素直に受け止めている。彼も少なからず差別を受けて生きて来たのだすぐに解るだろう。その辛さを……。

「ま、俺のことはいい。俺はそれで一般人を殺したわけじゃないんだ」

「どづいうことですか？」

「アイツはな……誓文が……生まれつき存在したんだ」

「俺にはそれが重要なことかすら解らないんです。そもそも誓文とは何なんですか？」

「そうだな。お前には刺激が強いかも知れんが……人間に向けて作られた機関増強の印だ。『人体実験』をし、その過程で生まれた副産物で……その人間に確実な悲しみにくれた人生を与える狂気の産物」

彼の体に浮いている偽誓文もその一つだと言っている。特に完成形だったのが正人の手の甲にあるそれだと彼はいう。誓文を植えつけられるの悪く言えば乞食や孤児など……その当たりの悪徳研究者から人として扱われない人だ。見つかり目を付けられれば哀れな運命をたどると決まった存在である。それを人と思わず連れ帰り『実験検体』^{モルモット}として用済みになったり失敗すると廃棄していたという。身勝手で人道から外れた話だ。

「そんなことが……僧院で？」

「ああ、だが、此処からが本題だ」

「はい？」

「言っただろう？ 奴は、正人は『生まれつき誓文があった』と言った。それがどういう意味か解るか？」

「え？」

彼は、人として育てられなかったのだ。しかし、奴らの誤算は人間として育てていれば後悔しない結果になったろう。その研究所は地下にあり人間が地上に住む場所……、そこで彼は暴走したのだ。彼の力は研究所でも未知数であり最高機密に属するものである。そのため、誤算だったのだろう。彼の……内部からの破壊でその研究所と半径五キロ以上のエリアが灰燼に沈んだのだ。しかも、一瞬で……。

「い、一瞬って……」

「事実だよ。俺も『僧院』に無理やり従わされている時に急行すると……その当時の県の育ての親にあたる『雅みやび 巖げんがく嶽殿』もそこで重傷を受け左腕を失っているんだ」

「な、あの人が!？」

「ああ、1997年に起きた僧院首長の断頭殺害事件を知っているだろう。あれは県が彼にかくまわれていることを誰かが告げ口したことから端を発する。それに、公表されているのは彼が情報操作を行い作った虚偽の事実。アイツは……県 正人は教皇すら殺しているんだ」

「そんなんつて！ アイツ何歳なんですか!？」

「いい事教えてやるよ。俺やアイツはな……人間として育てられはしていない。俺達は彼に保護されるまで冷凍保存されたりして身勝手に……検体として扱われ生きて来た。だから、もしかしたら、特に俺は戦前の人間かもしれないんだ」

哲の顔が凍りついた。その後、すぐに、話題を切り替える。鬼神が違つ言葉を発する。それからの彼の足取りと彼に関係する事象であった。人間として育てられるようになった彼は狂い出した。それまでうけなかつた物を急に与えられたのだ驚くのも当たり前だ。加え、彼には五歳程度の時にやっと自我と感情と呼べないもYES or NO の選択ができるようになったのだ。そして、彼ら、友人と呼べる人間に出会えた。そのころから次第に人間としてなりたっているのだと……鬼神が伝える。

「これくらいだな。俺がお前に言えるのはあくまで客観的に見た奴の存在と経緯だ。少し、解つてやってほしいのはあれがアイツの精一杯なんだよ」

「解りました」

「よし、俺から言えるのはこれで本当に終わりにしよう。時間を取らせてすまない。飯は俺がおごろう」

「いえ、さすがに、食欲が……」

「そうか……解つた」

それだけのことを話されているのだ当然である。人扱ひされたことのない人間に成りきれていない正人。それを知ってしまったのだ。解らなくもない。うすうす気づいては居たらしい哲はそのまま寮に帰る。そこにはダンベルを握る彼が居た。目があまり機嫌がよさそうではなかったようだ。彼が最初に放つた言葉は……。

「刀は？」

一瞬固まつた哲が鬼神教官から渡されたそれを丁重に返す。その手つきに気付いたらしい正人は風呂に哲を誘つた。それから自身の体験を伝える。

「ふう、鬼神さんに聞いたんだろう？ 別にそれは間違っちゃいないがな。俺が誓文を持って生まれたことについて俺は気にしてはいない」

「だが、どうしてお前は此処に来る気になっただ？」

「俺はな。この力は『誰かを守る』ために使いたいんだ。この黒刀は、俺の魂なんだよ。先代『パラディン聖騎士』にいただいた物。俺の腕は彼に仕込まれた」

長い髪を洗う正人の横で地毛と言い張る哲もワシャワシャ洗う。湯気の立つ天然の温泉が使われた寮の風呂。そこで体を洗い終えると正人は目を閉じて湯船につきり口を開く。そこまで彼は重いと思っていないらしい。傷だらけの肉体を持つ二人は案外並ぶと怖い。やくざ映画に出来るくらいには迫力がある。そのせいか、話題もそこに見合っている気がした。

「理由だったな。強いて言えば……。俺は、お前らを守りたいがために此処に来た。俺はここに来る前に幾分かのデータを閲覧し、すぐに見つけた。お前ら二人と、教官の名前に鬼神さん。そして、昔からの知り合いや土地管理者に先代の名を。俺は失いたくないだけなんだ」

眉のひそめ口をへの字に曲げた後に哲が小さく口を開いた。彼も幼馴染の一人である。気にすることはあるのだろう。それに、心の内ではもっと言いたい事があるのだろうがすぐに言わないようだ。彼は長く居ると同性の友人と言うことで空気が読める。それが解っているように正人自身もその話になづきそれ以上に話に触れようとしなかった。

「まあ……部外者の俺が過去のこたあ言えないが……。言わせてほ

しいのは、俺からしても龍からしてもお前は大切な幼馴染だし守りたいし心配もする。頼むから、背負い込まないでくれ。俺が危ねえ時は全力で背中を守ってほしいが逆もあることを理解してほしい」

二、三度うなづくとすぐに風呂からあがる正人。それに合わせて哲も上がり夜半過ぎまで静かに過ごした後、彼も就寝する。

「よし、この前から敵に実習をことごとくつぶされている訳だが…」
「…」
「どつやら今回もつぶされそうですよ」

今回は戦闘機団と近隣外洋に待機している大型旗艦と空母が待機している。その時、鬼神がニヤリと笑い正人を見た。戦闘機は攻撃用格闘機が三機編隊を組み滑空している。爆撃機の到着を待っているらしい。こちらは鬼神教官が指示を出し航空機を出勤させていない。今、空に出ようとすればすぐに叩き落とされるだろう。正人が刀をつかみ動きだした。すると、哲もつく。これも鬼神の指示らしい。強力な武装を据え付けられた二人がそこから消えるとまわりのメンバーが居なくなり始める。この戦況の状態でなら二人が居れば問題ないという鬼神の判断からである。加え、龍とレイには別の任務を与えられていたからだ。

「うう……何で、私の相手がレイなの？」

「同意」

「でも、作戦はしつかり成功させなくちゃ」

「うむ、で、どうする？ 私は空を飛べん」

「それは任しといて！ レイは今回、爆弾になるんだから。『鍛えて熱くなった鉄は……鋼鉄も貫く』んだからさ」

龍の背中にレイを乗せ急上昇した。むろん、格闘機が後ろを取る

うと先回とひねりを合わせて後ろを取ろうとしている。しかし。肩に付けた金具をつかんでいる彼女を振り落とさないように後ろからの攻撃を回避しつづけていた。

「よし、此処からは私の管轄になろう。私は、任意の物を超硬質化できる。お前と私は今はダイヤモンド並の高度を持っている。それに、だ」

背中ofバーにワイヤーをかけて体を起こしガトリング式の機銃を龍の背中に据え付ける。その後、彼女の銃を構え……、コックピットへ的確に撃ち込み次々に蒼い海に落としていく。

「きつもちい……い！」

「ふふ、私も、こんなに気分のいい作戦は初めてだ。行こう！」

「うん、でも！ 『鋼鉄軍女』^{アイアンメイデン} はリスクが大きいはずだから無理はしないで！ 正君も二人で帰るのを望むだろうから」

正人と哲も作戦を決行した。哲は脚を水かきへ変容させて爪を巨大に、硬質化も進め敵の空母の船底を切り崩しをしているらしい。なかなか簡単にはいかないだろう。厚さ数メートルの鉄板を切り破ろうとしているのだ。そこに正人が恐ろしいことをしてくれた。哲に海上に上がるようにあがるように言っている。それは……。

「哲！ あがれ！」

「うおわ！ 何で飛行機……そういうことか……。な、正人？ その振りかぶった刀は……ぶった切る？」

「おう」

「そうか、それならそれでいいが早く済ませてくれ！」

龍とレイは既に第二作戦に移行していた。上空の爆撃機団にレイ

が飛び乗りエンジンを破壊しつつ退却させる。すると、レイが飛び降り落下を始め……最後に、正人がキャッチして顔を強ばらせた。上空の龍が何かと戦闘をしていたのだ。黒い波動と龍の紅い炎がぶつかり……。

「哲！ 『アイアンメイデン鋼鉄軍女』！」

「解ってる！ 龍がやられた！」

真つ逆様に落ちてくる龍を正人が空中で抱きしめ哲が預かりレイが周りのメンバーが避難を呼びかけ鬼神が彼を止めにかかる。正人がしようとしていることが何かしてはまずいことらしい。……形を抑えようとする鬼神を振り払い正人が力を発動する。これまでは誓文に頼らず自らの力で体得してきたことだけで闘っていた。その彼が『パラディン聖騎士』の力を解き放つ時がきたのだ。

「我、生命の使者を『拒絶』する者。全てを拒絶し自らの信ずる道をただひたすらに力を振るう白き罪人なり。黒き騎士の守護を受け、我は新たななる世界の代弁者とならん」

吹き飛ばされた鬼神教官を生徒が発見し哲や龍、その近隣の島々の人々が立会人になり彼の覚醒を見守っていた。彼が何故、このタイミングを選んだのかは謎だ。しかし、彼はその道を選んだらしい。破戒の騎士として立ち上がる。

「ま、正君……」

「正人……」

「あの馬鹿……」

「正……」

『闘氣』が鎧に変化し黒刀も『聖剣アンビション』に変化してい

く。そして、背中に白い翼が生え、一瞬で空高くに上がっていく。そこには黒いオーラを纏った女性の騎士がいた。そこから二人の話が始まる。話ばかり合わないまま抜かれた剣どうしがぶつかり合う波動が光空を覆い始めた。そして、敵軍が次々に動き出しレイの指示で軍事化が総動員されていく。その指示に合わせるように次々に異能者や魔法関連の学生達が召集に応じ現れ、鬼神教官や貴正教官の指示で陣張りが始まった。

「お前は何者だ？」

「『^{パラディン}聖騎士』か……」

「その剣……」

「来ないのか？」

「……会話が」

「行くぞ！」

黒い波動を帯びた剣と白い剣がぶつかり合いお互いに傷を作りあうと鮮血が海に降り注ぐ。正人が敵の黒騎士に斬り付け腕を切り落とすが……瞬時に腕が再生してしまい全く意味を為さない。その間に下でも全体が大きく動き出した。重傷を負っている龍の看護に魔法科からの推薦で『^{セイント}聖女』が回復魔法を使用し高速回復をしている。最高速の回復をして龍が戦場に立てるだけの体力を作っているのだ。そこに完全武装に異能を解放した最高位の力誇る教官二人が前線に立った。

「鬼神、無理だけはするな」

「お前こそ、前衛線には出るなよ」

「解っている。俺はお前の背を守りお前は俺の盾になるんだからな」

「懐かしいな。何歳のころの話だよ」

「ん？ 確か、30くらいじゃなかったか？」

鬼神教官が黒いオーラを出しながらハルバートを振り回し右肩に小柄なレイを担ぎ海面を駆ける。走るといふよりは高速で滑っているに近いところがあるが味方の軍艦が砲撃を開始した時点でレイと鬼神が敵の軍艦に到着していた。こちらは防備戦だ。船体の横面を見せ砲撃を開始する。魚雷を撃たれば大損害を受けかねないがこちらには回復した龍がいた。彼女も実は能力解放の許可が下りている。一度落とされたことを根に持っているのと上で戦っている正人の手助けに行けないもどかしさでとても機嫌の悪い龍。その彼女が……四方八方に炎の縄を打ちつけ敵艦を鎮める補助をしていく。加え、砲撃してきた増援の航空部隊を全滅させるべく再び上空に上がり彼女の本来の力を打ち放つ。

「業焰演武！」

炎の球体が航空部隊の全滅をきした。破壊力抜群の熱線爆弾が空中で破裂し航空部隊はパーツを分解バラバラにされておちていく。戦艦に残る二人も各々の力を解放して的を穴あきの使い物にならない金属の塊にしていく。鬼神の力も未知数ではあるが彼も黒い波動を持っていった。そして、彼は何かを気にしている。空中に浮いている二人の姿だった。そこに流れ弾が向かいレイが拳ではじき返す。

「教官らしくもない」

「すまない。少し気になるところがあつてな……」

「解りました。ですが、彼の力にしては落としていませんか？」

「そうだな。確かに……。俺達も退こう。此处も時期に落ちる」

「了解しました」

レイと鬼神教官の退避を確認すると島の一番高いところからライフルらしい銃を構えた男が敵の最期を告げる弾丸を的に撃ち込んだ。金属を容易に貫く特殊弾で打ち抜きその戦艦を沈め被害を最小に抑

えるためにこちらの軍も撤退し、『セイント聖女』率いる回復魔導師の部隊が
けが人の手当てを始めた。これはやはり戦争であり学生や本職の軍
人にも死者が何人もでている。悲しいことだが、これを前進し変え
なければ彼らは報われない。遺体を回収する作業はおそらく上の二
人の攻防がやまなければ始まらないだろう……。

「終わったな……」

「え？」

「行ってくる」

「教官！」

それから数分後、ずぶぬれになった鬼神教官が二人の人間を担い
で帰って来た。正人と黒い鎧を身に付けた同年代らしい少女を近く
に寝かせると警戒している面々に言葉を告げると黒い騎士を抱き上
げて帰って行く。追うようなしぐさを見せる軍関係の生徒を止めた
のは……哲だった。彼は鬼神の特殊な過去を聞いている。そのため
絶対に引けないと鬼神をかばったのだ。『アイアンメイデン鋼鉄軍女』ことレイもそ
れが理解できたらしく軍事科の生徒に厳しくその先に触れないよう
に話をした。

「お前たちにも触れられない過去の一つや二つあるだろう。あ
の教官は私と共に任地に居られる時から上の二人には気をかけてお
られた。お前たちも野暮なことはするでない」

正人が起き上がり何か重そうなことを思っているような目をした。
そこにこれまで戦闘にかかわった者が皆集まる。特に上のクラスの
メンバーは全員だ。

「どうしたの？ 正君」

「あの女、鬼神教官に所縁のある人物だ」

「そんなことは誰でも解っている」

「レイ様？ そんなことはおっしゃられずに気づついた正人様の事をお考えください」

「『^{セイント}聖女』さんまでこちらの仲間か……。何だっけ？ シュバルツエン……」

「シュバルツエン＝エレシレナ・マクシンミア。回復、介護魔法科主席学生でシュバルツエン家のお嬢様」

「その声は瀧蓮寺さんですか？ これで、あの方ともう一人以外は僧院の求めた形ですね」

「それはそうと、そろそろ教えてくれてもいいんじゃないのか？

あの人の事」

「解った。あの人は本当は結婚して幸せな家庭を築いているはずなんだからな」

鬼神の過去に含まれるくらい部分がさらに明らかになる。正人が助けられたところには彼は独り立ちし本来なら絶対に彼とは会わなかったはずだったのだ。彼は……奥さんと娘を死ぬ気で守り抜き先代の元に逃げ込んできたという。僧院にマークされていた彼はどうにも守り切れなかったと言っていたのだ。

「彼女はその娘さんだ」

「それ……ホント？」

「形式上は俺達と同じ年齢区分に分類されるはず」

「ん……。私は、僧院を許せんのだが……。同じ意思の者は居るか？」

レイが憤りを顔だけにとどめられず小さく声を漏らした。そこに、鬼神が帰ってくる。

「俺は、お前らを束縛する気は毛頭ない。だが、死んでほしくはない。だから、できればお前たちが外に出ないで済むなら……。俺一人

で事を済ませようとしたんだ。だが……」

正人が口を開き鬼神の肩に手を置いて答える。彼も先代に助けられた口であり

兄弟のような関係だからだ。

「哲と俺もそうですが……頼ってほしいと思います。俺もあなたに助けられたところが大きい。いや、これからも教官として助けてもらうところはたくさんあるんですから……頼りにしてくれないと困ります」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0517w/>

零の武刀者

2011年10月10日11時01分発行